

初期韓国シャーマニズム研究における「秋葉隆」の業績

金 花子*

はじめに

植民地時代における日韓両国研究者の学術業績の発掘と評価は、研究自体に屈折した部分があり、さらには感情的な側面もあって、特に韓国人研究者が積極的に取り組むことは戦後永い期間タブー視されてきた。しかし、近年の傾向として、植民地人類学、植民地民俗学の見直し作業が日韓両国の研究者の課題となり、時代性を踏まえた検証がなされつつある⁽¹⁾。

そこで本稿でも、韓国民俗学の歩みを跡づける作業の一環として、植民地時代における初期韓国シャーマニズム研究を取り上げる中で、特に日本人研究者秋葉隆の業績に焦点を絞って見て行くこととする。

韓国農村民俗学と韓国シャーマニズム研究に取り組んでいる崔吉城(1940-)は、その著書『朝鮮の祭りと巫俗』⁽²⁾の「あとがき」で、日本人の研究との関わりについて、「民俗学というのは(中略)意識的、あるいは無意識的に民族主義がはたらいっており、偏見を排除することがまず難しい」と述べている。冒頭述べたごとく、確かに植民地時代に関しては、複雑な感情が交錯して、公正な眼で当時の日本人研究者の業績を韓国人が理解し評価することはむずかしいと思われる。

しかし、植民地時代の初期韓国シャーマニズム研究は、研究をリードした秋葉隆の研究態度や、研究対象である韓国シャーマニズムにおける日本の類似習俗に対する優越性もあって、比較的公正な眼で捉えられてきた。例えば、柳東植(1922-)の『朝鮮のシャーマニズム』⁽³⁾の「序説」では、「朝鮮シャーマニズムにかんする

総合的・体系的研究は秋葉隆によってはじめてなされ、(中略)この秋葉のすぐれた研究と著作が出版されて以来、朝鮮のシャーマニズムにかんする科学的総合的研究はほとんどなされていない」と記し、1960年代に至ってようやく若手研究者(玄容駿・張籌根・崔吉城ら)による本格的な研究が現れてきたと述べている。

また柳は、「村山智順は当時朝鮮を支配していた日本の総督府の囑託として民間信仰資料を蒐集して出版した」と記し、堀一郎(1910-74)も「総督府の調査というのも、秋葉隆さんや赤松智城さんが何ヶ所か現地を歩かれた以外は、どうも警察などを使った統計などが多い」⁽⁴⁾と述べ、植民地統治下での強権による調査と秋葉の研究を峻別している。

近年、伊藤亜人(1943-)の「秋葉隆」⁽⁵⁾は、村武清一「末弟子からみた秋葉隆像」⁽⁶⁾などによりながら、秋葉の研究が韓国民間習俗を幅広く扱い、社会・文化を総合的に理解する上で二重構造のモデル(後述)をうち出したことを評価した。また崔吉城「日帝植民地時代と朝鮮民俗学」⁽⁷⁾は、秋葉が朝鮮民族を蔑視することなく、朝鮮全土をフィールドとし、「朝鮮の人」すべてをインフォーマントとする考えに従って精力的に研究を進めたと述べる。

なぜ戦前において秋葉は本格的な研究に取り組み得たのか。それは、上述のごとく秋葉の研究対象とした地域と秋葉の研究姿勢によるものと思われるが、まずは秋葉の研究姿勢を中心に、その背景を探る意味で、シャーマニズム研究からみた初期韓国民俗学の歩みを概観しておきたい。

* 神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士後期課程

1. 戦前期研究史の概観

戦前にあって、日本人民俗学者の中で韓国民俗学の開拓にまで手を染めた研究者はほとんどいなかった。日本民俗学の父といわれる柳田国男(1875-1962)の影響が大きく、柳田の一国民俗学の方針に従ったためである。とはいえ、頑なに一国民俗学を守り通したかに見える柳田も、韓国研究の重要性を論じた「比較民俗学の問題」⁽⁸⁾を『朝鮮民俗』第3号(昭和15年<1940>)に寄せており、韓国研究への関心は持っていたのである。

一方、韓国人による韓国民俗学の歩みについては、李杜鉉(1924-)他による『韓国民俗学概説』⁽⁹⁾の序論に要領よく纏められている。同書において戦前の特記すべき動きとして挙げられているのは、神話・信仰・文化史の崔南善(1980-1957)や宗教・習俗の李能和(1869-1945)による初期のシャーマニズム研究、および民間信仰の宋錫夏(1904-1948)と巫歌の研究にも手を染めた孫晋泰(1900-?)などによる朝鮮民俗学会(この学会の会誌が『朝鮮民俗』⁽¹⁰⁾)の創設(1932)である。しかしこれらの研究は現地調査よりは文献研究にウェイトがかかり、その上、昭和14年(1939)前後からは韓国語による調査・研究・発表がしにくい状況となった⁽¹¹⁾。日本人が理解できない朝鮮語を使うことは厳しく規制され、難解な呪文や歌謡を扱うシャーマニズムを韓国人研究者が取り組むことは不可能となった。そのため上記の諸研究は、韓国民俗学にとって大いなる財産ではあるが、厳密な研究は戦後の再出発を余儀なくされた。

したがって、戦前において韓国民俗学に手を染めた研究者は、アメリカ人のアンダーウッド(1859-1916)かハルバート(1863-1949)⁽¹²⁾を除けば、ほぼ日本人に限られた。それも民族学(文化人類学)、社会学、宗教学、言語学といった民俗学以外の領域を専門とする研究者が、京城帝国大学の教官か、朝鮮総督府の調査に従事する研究者であった。

松本信広(1987-1981)⁽¹³⁾は慶應義塾の出身

で、初期の柳田門下生でもあるが、フランスのマスベロ(デュルケム派)の指導を受けた民族学(文化人類学)者である。シャーマニズムに関連する研究は少ないものの、昭和5年(1930)の『民族学』2巻6号に寄せた「芋掘り長者の話」⁽¹⁴⁾という短編は注目に値する。柳田の「炭焼小五郎が事」(朝日新聞大正10年<1921>1月1~4日、のち『南海小記』昭和元年<1926>に収録)の梗概をマスベロの要請でフランス語に訳す際に、『三国遺事』(1280年に成立した韓国の歴史書)の類話を紹介して柳田が指摘する鉦山師・鍛冶師と宇佐八幡宮との関係をさらに古代朝鮮にまで及ぼしたものである。文献調査に終始しているが、広くユーラシア大陸での日韓の説話を扱った「大陸と日本」⁽¹⁵⁾などと共に、今日の日韓比較文化史・比較民族学の先蹤として注目できる。

また三品彰英(1902-1971)⁽¹⁶⁾は京都帝国大学の出で、アメリカのエル大学客員教授として渡米の際、ローウィ(ボアズ門下)の指導を受け、「古代朝鮮の祭政と穀霊信仰について」(『史林』102, 1936.のちに『古代祭政と穀霊信仰』1973に収録)でシャーマニズムに触れている。この外に『日韓神話伝説の研究』(1943)、『新羅花郎の研究』(1943)、『朝鮮民族学』(1960)などがあり⁽¹⁷⁾、文献中心の研究ではあるが、古代史・神話学などにおける日韓比較研究に大きな功績を遺した。

京城帝国大学には、言語学の小倉進平(1882-1944)、宗教学の赤松智城(1886-1960)、民族学の秋葉隆(1888-1954)、社会学の鈴木栄太郎(1894-1966)などがいた。やはり多くは文献主体の研究であり、しかもシャーマニズムは赤松、秋葉以外は手がけていなかった。

さらに総督府に関係した研究者として、警官出身で風俗研究の先鞭をつけた今村鞆(1870-?), 法制度研究の野村調太郎、農村経済研究の善生永助(1885-?), 民俗宗教研究の村山智順(1891-?)などがある。「雑攷」で知られる鮎貝房之進(1864-1946)も総督府の威光を利

用している点でこのグループに入れてよいだろう。ただしシャーマニズムに関わっていたのは村山（『朝鮮の巫覡』1932など）だけである。この一群の研究者は、総督府の調査として文献を博搜すると共に若干は実地調査もこなして大部の報告書を遺しているが、基礎的な調査に終わったものが多い。

韓国のシャーマニズムは、日本周辺のシャーマニズムを研究する上で、日本の古代、南方の沖縄、北海道のアイヌ以上に重要な存在である。しかし、戦前期の研究としては、韓国人では李能話の「朝鮮巫俗考」⁽¹⁸⁾（1927）と孫晋泰の『朝鮮神歌遺篇』⁽¹⁹⁾（1930）があるくらいで、やや纏まった著作としては、日本人の村山、赤松、秋葉などが総督府の調査報告および帝国学士院の助成による調査を発表したものが注目される程度であった。

戦後は、1960年代に、韓国のキリスト教伝導の中心人物でアメリカに留学したプロテスタント学者の柳東植が、なぜ韓国でキリスト教が伸びないかに疑問を持ち、結局韓国民衆の心を永い間とらえてきたのは儒教でも仏教でもなくそれより古いシャーマニズムであることに気づき、東京大学の堀一郎研究室に来て研究を始めた⁽²⁰⁾。そして、柳の『韓国シャーマニズムの研究』が公刊（1976）されると、それ以後、堰を切るように韓国におけるシャーマニズム研究が隆盛を見せるようになったのである。

ちなみに、柳田の女婿で、『シャーマニズム』（1951年、堀訳書昭和49年<1974>）の著者エリアーデ（1907－1986）と親交のあった宗教民俗学の堀一郎は、柳田の没後、柳田の嫌う片仮名表記の術語⁽²¹⁾である「シャーマニズム」なる語を日本民俗学会に定着させている。

2. 秋葉隆の経歴

秋葉隆は、明治21年（1888）千葉県に生まれ、大正10年（1921）に東京帝国大学文学部社会学科を卒業。建部遯吾（1871－1945）の指導を受けた。大正13年、京城帝国大学の社会学科に奉

職すると同時に、当時の慣行で2年間の欧州留学を命ぜられ、ロンドン大学、パリ大学等において社会学・民族学を研究し、マリノフスキー、ラドクリフ＝ブラウンなどの影響を受けた。大正15年（1926）からは、朝鮮を中心に、満州・モンゴルまでを調査地域として民俗・社会の調査研究に従事し、巫俗（シャーマニズム）を始め、村落社会、民間信仰などに関する研究業績を残した。

秋葉にとって、韓国のシャーマニズムは、柳東植のように目的をもって接した対象ではなく、幅広く韓国社会全域の民俗調査に従事している中で出会った研究対象の一つであった。ただ、それを後述のごとく体系化を図るまでに深化させたのである。

秋葉は、戦後一時九州大学の講師を勤めたが、昭和24年（1949）に愛知大学の教授に就任した。愛知大学では、翌年、総合郷土研究所を設立して初代所長となり、地元の三河文化の調査研究を開始した。その間、日本民族学会理事、日本民族学協会顧問、日本社会学会評議員、朝鮮学会幹事などを歴任し、昭和29年（1954）10月に逝去した⁽²²⁾。

なお、京城帝国大学時代の教え子に文化人類学の泉靖一（のちの東京大学教授、1915－1970）、愛知大学時代の助手に社会人類学の村武精一（のちの東京都立大学教授、1928－）がいる⁽²³⁾。

秋葉の著作には、単行本として次の諸書が知られている⁽²⁴⁾。

『朝鮮巫俗の研究』上・下（赤松智城と共著）

大阪屋号書店 1937、38年

『朝鮮巫俗参考図録』大阪屋号書店 1938年

『満州民俗誌』日文化協会 1938年

『満蒙の民族と宗教』（赤松智城と共著）

大阪屋号書店 1941年

『東亜民俗誌－北方編－』近沢書店 1944年

『朝鮮巫俗の現地研究』養徳社 1950年

『朝鮮民俗誌』六三書院 1954年

秋葉隆の研究姿勢について特記すべきことは、現地調査に主眼をおいている点である。また京城帝国大学赴任直後に赤松智城と知り合い、後に学部後輩の鈴木栄太郎を招いているが、研究上、この2人と交流をもち得たところにも秋葉の研究における方向性がよく現れている。

赤松智城は京都帝国大学哲学科の卒業（明治43年<1910>）で、松本文三郎の下で『宗教研究』の発刊に尽力、昭和2年（1927）に京城（現ソウル）に赴任したデュルケム流の宗教学者である。昭和17年（1942）に秋葉が呼んだ鈴木栄太郎は、秋葉の大学院時代の指導教官であった家族社会学の戸田貞三（1887－1955）と共に昭和14年以降『家族と村落』を監輯した農村社会学の第一人者であった。赤松は昭和4年（1929）に『軌近宗教学説の研究』⁽²⁵⁾を世に問い、鈴木は昭和19年（1944）に『朝鮮農村社会踏査記』⁽²⁶⁾を刊行し、共に高い評価を得ている。

3. 『朝鮮巫俗の現地研究』の位置づけ

上述のごとき状況の中で、秋葉の現地研究を最優先する研究は、初期韓国民俗学研究で特筆すべき内容を見せている。例えば、家祭・村祭について秋葉が提示した韓国儀礼体系の二重組織論（儀式と巫式）⁽²⁷⁾は、今日なお韓国社会を論ずる際の基本的視点として認められている⁽²⁸⁾。対象をシャーマニズムに絞ってみても、今日の眼で批判に堪えうる研究としては、主として秋葉が執筆した赤松との共著の『朝鮮巫俗の研究』⁽²⁹⁾下巻と同書の秋葉執筆などを纏めた『朝鮮巫俗の現地研究』⁽³⁰⁾が目につく程度である。特に『朝鮮巫俗の現地研究』は、植民地時代に進められた初期韓国シャーマニズム研究を集大成した書物であり、戦前の研究としては、韓国人・日本人・欧米人の著作を問わず、唯一の纏まった内容を持つ研究書である。

この『韓国巫俗の現地研究』は、昭和25年（1950）5月、養徳社（天理教団の関連出版社）から刊行された。これは、秋葉が京城帝国大学赴任以来、総督府、帝室学士院、外務省などの援助

を得て行った現地調査を基礎に、昭和16年（1941）に東京帝国大学に提出した学位論文であり、赤松との共著である『朝鮮巫俗の研究』下巻の秋葉の担当分（8章半）を始めとする秋葉の既発表論考24篇を修正増補して体系化したものである。これにより秋葉は文学博士の学位を授与される。その後、書物になる段階で戦災に遭うが、送り返されていた本文原稿を日本に持ち帰ったことで、天理大学の援助により、戦後、再度活字化が図られたものである。

秋葉は、本書の目的を、「对象的には巫俗（シャーマニズム）という社会現象を朝鮮の全体的社会構造の中に捉えて、その社会学的意義を明らかにするにあり、方法的には現地研究に於ける深化的社会学的方法の必要性和妥当性を吟味するにある」とする。秋葉のいう「現地研究」とはフィールドワークのことで、現在であれば「現地調査」と訳すべきところである。これは、秋葉がロンドンで影響を受けた同世代のマリノフスキー（1884－1942）やラドクリフ＝ブラウン（1881－1955）らの用いた方法であり、秋葉は特にマリノフスキーの方法を評価し、意欲的に取り組んだものと思われる。

赤松・秋葉共著の『朝鮮巫俗の研究』より10年早く、村山智順の『朝鮮の巫俗』⁽³¹⁾が刊行されている（朝鮮総督府調査資料第36輯）。しかし、この書物は、700ページの大著とはいえ、凡例に「本調査の資料は大部分各地の警察署の手を煩はして得たる報告に依ったものである」と明記しているごとく、昭和5年（1930）8月現在の全道警察署報告などに依拠しているほか、『李朝実録』『万機要覧』など文献からの引用が多く、また李能和「朝鮮巫俗考」、孫晋泰『朝鮮神歌遺篇』など先行研究も随所に引用する一種の編纂物である。貴重な資料がないわけではないが、これを秋葉や赤松の研究と同例におくことはできない。

なお、崔吉城「日帝植民地時代と朝鮮民俗学」⁽³²⁾によると、秋葉は学生時代に勤務していた岩崎家のモリソン文庫（のちの東洋文庫）でシャー

マニズム研究者でもあった岩井大慧（1891 - 1971）と同僚であったが、その時期にはシャーマニズムに関心はなく、京城帝国大学赴任後、民俗学研究や巫俗研究へ精力的に取り組んで行ったようである。秋葉の朝鮮巫俗の本格研究は、留学（1924 - 26）から戻り京城帝国大学での授業が始まった後と見てよからう。

4. 秋葉の巫俗研究における用語と分類

『朝鮮巫俗の現地研究』によると、「巫俗」は秋葉の造語のようである。秋葉は、シャーマニズムの訳語として従来の「薩満教」や「巫術」に代えて「巫俗」を提唱したとする。公刊書としては既に李能和の「朝鮮巫俗考」（1927）が出されているが、昭和5年（1930）から朝鮮・満州でのシャーマニズム研究の成果を盛り込んだ赤松・秋葉共著の『朝鮮巫俗の研究』（1937）以後、術語として定着したことを言ったものであろう。韓国民俗学で現在も「シャーマニズム」の語と並んで「巫俗」が用いられていることは注目されてよい。

そこで、『朝鮮巫俗の現地研究』の内容を検するなら、秋葉はまず、巫祖伝承について諸資料を整理して4類に区分すると共に、共通する特色を3点挙げる。その4類とは、智異山の聖母天王を巫祖となす「聖母伝説」、王女・公主をもって巫祖となす「王女伝説」、貴族の女性を以て巫祖となす「貴女伝説」、王命を奉じて巫事を始めたとする「王巫伝説」の4つである。3つの特色とは、第1に巫祖が多く高貴な女性であること、第2に巫祖が異常な生活を経験すること、第3に巫祖が中国やインドの出身で、道教や仏教的な要素が見られるということである。

さらに韓国シャーマニズム研究の基礎作業として、巫の呼称と類型を整理し、職巫（professional shaman）を3つに区分する。女性のシャーマンに熟巫と生巫がおり、男性のシャーマンに覡がいるという3区分である。秋葉は熟巫に「巫（ムウダング）」、生巫に「生巫（ソンムダング）」、覡に「覡（パンス）」という漢字表記ならびに朝

鮮語の呼称を与えている。

「ムウダング」は、大巫、または丹骨（タンゴル）巫（丹骨は檀越<ダンウォル>の転音で得意先の意）とも呼ばれる。機能としては歌舞降神を行う。なおムウダングに巫堂、巫党の字を当てることもあるが、基本文献でのハングル表記の中でムウダングだけは「巫ダング」のように記し、決して「巫堂」等の表記はしないので、北アジアに共通して見られるウタガン・ウダガンなどに近い本来の韓国語である可能性は高いとする。

なお、男巫をムウダングと称する地方もあるが、そうした地方には女巫がいなかったり、いてもきわめて少ないと分析している。また歌舞降神する覡をパクスウムダングまたはスングと称することもあり、歌舞降神をする男巫は女性的で女装をすることが多いと指摘して、歌舞降神は本来的に女巫のムウダングの仕事であったと結論づける。

「ソンムウダング」については、歌舞降神に熟達しない未熟なムウダングで、自室内に神堂を設け、祈祷とト占を行うとする。かつて秋葉は踊る巫と踊らぬ巫という区分しており、歌舞降神ができるかできないかは重要な区分点となる。

また「パンス」は盲目の男である場合が多いが、祈祷とト占を行う点で生巫と同じであるものの、神堂は持たず、多くの場合、歌舞降神もできない。忠清道・江原道では目明きの男巫をパクスと称するが、「パンス」はパクスの転訛であろうとし、パクスは北アジアに広く存在するパーシ、バクシ（博士）と同系統の語であると考えられるという。

この外に「家巫」とよばれる大多数の一群もあるが、これは職巫から除外している。

次に入巫の過程を取り上げる。これは秋葉の研究の中で最も高い評価を受けている研究領域で、ヨーロッパの研究史を受けついで現在の日本人研究者の分類にほぼ合致している。現在は一般にシャーマンを召命型（神に選ばれたとする入巫形態）、世襲型、修行型に分類するか、召

命型と世襲型、召命型と修行型とする⁽³³⁾。一方秋葉は、第1を世襲的入巫、第2を降神の入巫(召命型)とする。また秋葉は世襲型に関して「全朝鮮の到る所殊に南鮮地方に盛んに見る」とし、召命型に関しては「巫家に生まれた者でなくとも、病弱その他の事情によって特異の信仰の所有者となり、己れの欲すると否とに拘らず、所謂神意に依って巫となる」とする。秋葉はさらに第3の分類として、貧者の経済的入巫というものも挙げるが、これは真正のシャーマンとは言い難いとして世俗的入巫とも称している。

これら、秋葉の提示した用語や区分には、現在も踏襲されているものが多い。

5. 秋葉の巫俗研究における韓国シャーマンの巫事と生活

秋葉は『朝鮮巫俗の現地研究』において、さらに職巫の祭事である巫祭を、家族的巫俗の「家祭」と邑落(集落)的巫俗の「邑落祭」に分け、祭神、祭壇、儀礼、機能等について分析している。これにより、赤松・秋葉の『朝鮮巫俗の研究』下巻以来の現地調査に基づく韓国シャーマンの巫術の種々相が巨細に記録され、今日の韓国シャーマニズム研究の基本型が示されることとなった。

家祭では、祭神と祭壇を取り上げ、家人自ら、また職巫が関与することを述べ、朝鮮民家の類型から祭神・祭壇等の配置を説明する。次に季節祭については、春祭と秋祭に分けて説明し、また十月に行われる盲覘の巫事(求命)に触れ、その他、臨時祭として、出産と婚姻の祭、病祭(病気に対する巫術)、死霊祭について説明する。そして家祭の組織では、巫俗が農村の家族制度と強く結びつき、女性の参加が盛んで、女性の悩みや病気に関する巫事が多いなど、女性的・母性的性格を有している点を強調する。

邑落祭については、参加するのがムウダングだけに限られる点を特色とするとし、その祭神と祭壇について述べ、大將軍と呼ぶ長生標や、城隍堂など、村落の聖所とその標識等に言及して

いる。邑落祭の一つである洞祭については、黒石里山神祭での職巫の参加しない洞祭(山神祭)や、徳物山都堂祭での職巫が参加する洞祭(都堂祭)を紹介する。そして洞祭の起源は三国以前に遡り、朝鮮時代に淫祠邪教として弾圧されたために多くは儒教儀礼を模した祭りとなっているが、本来はどの祭りにもシャーマンが参加したであろうことを示唆する。この点は崔吉城を始めとする戦後の多くの研究者が強調するところであり、その先蹤ともいべき考察として評価できる。さらには洞祭の遊樂的経済的機能についても触れている。

次に巫装について、「神衣」と「神帽」に分けて説明し、持物として「扇」「神旗」「神竿」「神刀」「鈴」「揺鈴」「鳴金」を、神鏡として京城帝国大学民俗参考品室(この施設の開設は秋葉の尽力によるところが大きい)所蔵の神鏡14面を紹介する。「持物」(巫具)は日本の能楽・神楽(かぐら)などの「採物」(とりもの)に相当する。さらに楽器として「杖鼓」「太鼓」「銅鼓」「行李」「水鼓」などを挙げる。また神歌(巫歌)に関しては『朝鮮巫俗の研究』上巻所収の数十篇の神歌は収録せず、同書下巻の解説のみを載せる。ただ、神歌については1960年代以後、張籌根(1925-)らによる採集が進み、ハンゲルと日本語訳で紹介した『朝鮮巫俗の研究』所収の50篇ほどの神歌に関しても今日ではほとんど意味を失ったようである⁽³⁴⁾。

さらに巫の家族生活につき、昭和3年(1928)以来60余地点を訪れ、300人以上の巫家を訪れた膨大な資料を基に分析している。まず神堂の重要性を説き、巫家名は神堂の名、降神した鬼神の名、地名などによるとする。さらに婚姻は、世襲巫の場合、巫夫と巫女の婚姻が一般的であるとし、巫夫は才人などと称して歌舞音曲に従い、巫女は丹骨などと称して降神のことに当たるとする。そしてこのような一族をサニ(山者)の血統と称して、常人とは違う穢れた筋の者と考えると説く。巫覘は朝鮮時代には私奴婢、僧侶、白丁(柳細工や畜獣の屠殺に従事する)、広大(曲

芸師), 喪輿軍(墓掘り人夫), 妓生, 工匠と共に八賤に数えられている。そのために巫女が嫌いで妓生(キーセン)になる例が多いという。

また巫の家族的地位については、巫事が巫女を中心に行われるため母権的傾向を帯びるとし、俗に遊惰なる男を「巫女の亭主」という言葉さえあると述べる。次に宗教的母系集団ゆへの収養的關係(養子縁組)と、姓に関する分析を記す。すなわち、神懸りになる少女が巫家に養われるとその巫女を神母とよび、少女は神娘と称せられる。神娘は神母の死後、神母の神堂を継ぎ、神母の息子と結婚することもあるが、そうでなくても巫名として神母の姓を名乗る習俗があるというのである。

巫の社会生活については、「巫団」と「丹骨制度」に分けて記述する。巫団は、地域的な同職者による超家族的団体であるが、農村の同族組織を模した一面を有し、また神霊との契約的な側面も有する。そして、巫団本部を北部では師巫庁、南部では神房庁といい、後者は近代では神庁とよばれているとする。

丹骨制度については、「子女の生育を巫家の神堂に祈る信者によって、所謂『神堂に売られた子』、即ち神の子となれる子女と巫女との間に生ずる収養母子又は寿永母子の關係に基づく(中略)、その結果成立する巫と檀家(中略)、巫と邑落及巫と国家との丹骨關係も亦この家族主義の線に沿うて成立発展せる」⁽³⁵⁾と述べる。なお「神堂に売られた子」とは、檀家の子供が丹骨巫を母として巫家に入ること、この巫女を寿永母とよび、子供は寿永子または寿永娘と称する。これらの研究は、巫の生活実態の変化した今日、貴重な調査報告となっている。

そして昭和11年(1936)に、韓国の普通学校(昭和13年より小学校と改称)の6年生500余人を対象に調べた意識調査の結果を分析して、子供の認識する巫俗の社会的認知度を見ている。

むずび

韓国のシャーマニズム研究は今日盛んに行われており、秋葉の研究と比べると、調査地域の拡大と比較研究の進展、巫儀の記述の詳密度において、数段の進歩を遂げている。とはいえ、基本的には今日なお秋葉による体系が踏襲されている。しかるに秋葉の研究は、研究史か基本型を示す際の参考として以外では重く扱われていないように見られる。その理由は、冒頭で述べたような一時代前の偏見によるものではなく、秋葉の研究が今日重視されているエスノグラフィ的な歴史や環境を含めた生活史の再現可能性に注意が払われていない点や、フレイザー的な分類と起源の探索に偏っているという見方によるものであろう。

しかし、秋葉によって韓国シャーマニズム研究の体系が打ち立てられた事実は研究史上逸することはできない。そして朝鮮南部を主たる研究対象地域とし、北部については参考地としつつ、満州以遠の事象の援用には慎重であるという手がたい考察、または同一性の損なわれない地域・期間内での十分なサンプリングという調査法などは、今日なお参考に値する。

また、巫現は朝鮮時代以来卑賤視され、檀家や一般常人との間に身分上の軋轢を見たが、その実態説明は最小限に止めるなど、人権にも配慮している。村武らによると、クリスチャンでもあった秋葉は、「朝鮮人」という言葉を使わず「朝鮮の人」と表現していたという⁽³⁶⁾。さらに職巫と家巫に一線を画し、しかも遊興や男女関係、経済的貪欲さなど、人間的な面も隠さずに見つめている。その結果、分析と考察に偏りがなく、基礎研究として今日なお有用性を失っていない。マリノフスキーに学んだ現地調査や総合的研究に主眼をおく文化人類学の方法を忠実に実践していると言えよう。

研究の継承という点では、秋葉の研究と戦後の研究の間には断絶がある。しかし、秋葉の手がたい基礎研究には今日なお通用するものが含まれている。一方で、韓国シャーマニズムには、世襲巫の一部など、既に失われた部分も少なく

ない。それらについては、秋葉の調査と研究を批判的に取り込みながら民俗誌と民俗史の懸け橋として正しく位置づけて行くことが必要であろう。

なお、秋葉の『朝鮮巫俗の現地研究』は、『朝鮮民俗誌』と共に韓国語に訳されている⁽³⁷⁾が、それはこの書が韓国シャーマニズムの基礎研究書として今日の韓国人研究者によって評価されていることを示すものといえよう。

(付記) 本稿は平成16年11月に一度脱稿したが、その後、一部に加筆修正を施したものである(平成17年2月修正)。

注

- (1) 例えば、中生勝美編『植民地人類学の展望』風響社、平成12年(2000)。朴賢洙「朝鮮総督府中枢院の社会と文化」(ハンゲル、『韓国文化人類学』12, 1980)など。
- (2) 崔吉城『朝鮮の祭りと巫俗』(日本語)第一書房、昭和55年(1980)。
- (3) 柳東植『韓国のシャーマニズム』(日本語)学生社、昭和51年(1976)。
- (4) 堀一郎『聖と俗の葛藤』(平凡社, 1975)所収の「紆余曲折」。初出は『未来』(未来社)昭和44年(1969)3月号。
- (5) 伊藤重人「秋葉隆一朝鮮の社会と民俗研究一」(『文化人類学群像3<日本編>』アカデミア出版会, 1988所収)。
- (6) 村武清一「末弟子からみた<秋葉隆>像」『社会人類学年報』3, 昭和52年(1977)。
- (7) 崔吉城『「親日」と「反日」の文化人類学』明石書店、平成14年(2002)所収。初出は『植民地人類学展望』(注1に同じ)。
- (8) のちに『定本柳田国男集』第30巻、筑摩書房、昭和45年(1970)に収録。
- (9) 李杜鉉・張壽根・李光奎(崔吉城訳)『韓国民俗学概説』学生社、昭和52年(1977)。韓国文原本、ソウル学生社、1973年。
- (10) この学会の会誌『朝鮮民俗』は、1933年に

創刊され(近沢出版部)、1934年に第2号、1940年に第3号を発刊して終刊となった。

- (11) 昭和12年(1937)から14年にかけて、日本による植民地朝鮮に対する皇民化政策が強化され、皇国臣民の誓詞(1937)、朝鮮教育令の改正(1938)、朝鮮民事令の改正(1939)とそれに付随して出された創氏改名に関する法律(1939)といった今日なお嫌日感情を懐かせる法令が施行された。
- (12) 柳東植『韓国のシャーマニズム』、崔吉城『朝鮮の祭りと巫俗』、李杜鉉『韓国民俗学概説』(注2, 3, 9に同じ)参照。
- (13) 松本信広は、学生時代から柳田の遠野や信州の調査旅行に同行した。柳田が初めて慶応大学で民間伝承を講義した大正13年(1924)から5年間は、パリ大学のソルボンヌ高等研究院に留学。『日本民族学の回顧と展望』(日本民族学会編、民族学振興会、1966)の大林太良・山田隆治による「歴史民族学」の項に評価が載せられている。また松本は、柳田に対しても、資料の欠を補い視点の不足を補う役割を果たしたことは一再でなかったという(大藤時彦「松本信広先生と日本民俗学会」日本民族文化の起源月報第1号、講談社、1978所収)。
- (14) のちに『日本民族文化の起源1, 神話・伝説』講談社、昭和53年(1978)に収録。
- (15) 注14に同じ。初出は『日本民俗学』83, 昭和47年(1972)。
- (16) 『日本民族学の回顧と展望』(注13に同じ)の大林太良による「日本・沖縄と周囲地域との比較研究」の項に評価が見える。『三品彰英論文集』全6巻、平凡社、昭和45-49年(1970-74)。『文化人類学事典』弘文堂、昭和62年(1987、「三品彰英」の項、依田千百子執筆)参照。
- (17) 三品彰英「朝鮮民俗学-学史と展望-」(『日本民俗学大系1, 民俗学の成立と展開』平凡社)昭和35年(1960)。(のちに『三品彰英論文集第3巻, 神話と文化史』平凡社、1971に収録)。

- (18) 李能和「朝鮮巫俗考」(『啓明』19) 啓明俱樂部, 1927年(のちに韓国文化人類学資料叢書Ⅱに覆刊, 1968)。
- (19) 孫晋泰『朝鮮神歌遺篇』(日本語) 郷土文化社(東京), 1930年(のちに『孫晋泰全集』に所収)。
- (20) 堀一郎『聖と俗の葛藤』平凡社, 昭和50年(1975)参照。個別論文名と初出は、「紆余曲折」が『未来』(注4に同じ)、「韓国の宗教事情」が『未来』昭和45年(1970)11月号、「シャーマニズムの問題」が駒沢大学宗教学研究室『宗教学論集』昭和45年12月号。
- (21) 柳田には「巫女考」(1913)、「毛坊主考」(1914)などの著作があり、日本語で言い換えられるものを欧文の片仮名書きにすることを嫌ったという(小池長之「堀一郎」瀬川清子・植松明石編『日本民俗学のエッセンスー日本民俗学の成立と展開ー』ペリかん社, 1979)。
- (22) 『朝鮮学報』9輯, 朝鮮学会, 昭和31年(1956), 島本彦次郎「秋葉隆博士の生涯と業績・著者論文目録」参照。
- (23) 注6に同じ。
- (24) 注22に同じ。
- (25) 赤松智城『晩近宗教学説の研究』同文館, 昭和4年(1929)。
- (26) 鈴木栄太郎『朝鮮農村社会踏査記』大阪屋号書店, 昭和19年(1944)。のちに『鈴木栄太郎著作集Ⅴ, 朝鮮農村社会の研究』未来社, 1973に収録)。
- (27) 秋葉隆『朝鮮民俗誌』(六三書院, 1954。のちに名著出版から覆刊, 1980) 所収の「家祭の二類型」および「村祭の二類型」による。初出の際の題目は「村祭の二重組織」(『朝鮮民俗』2, 1934)、「朝鮮家祭の二重組織」(『年報社会学』3, 1935)。
- (28) 『朝鮮を知る事典』平凡社, 昭和61年(1986, 「秋葉隆」の項, 伊藤亜人執筆) 参照。村武精一「故秋葉隆博士の遺著『朝鮮民俗誌』をめぐってー社会人類学的断想ー」(『愛知大学総合郷土研究所紀要』2, 1955。のちに『家族の社会人類学』弘文堂, 1973に収録)。
- (29) 赤松智城・秋葉隆『朝鮮巫俗の研究』上巻・下巻, 大阪屋号書店, 上巻は昭和12年(1937), 下巻は13年(1938)。のちに大空社よりアジア学叢書24・25として覆刊(1997)。上巻は580ページで, 巫の祭儀における神歌・祝詞をハングルと日本語訳で採集した資料集。下巻は590ページで, 12章の研究および資料, 図録, 索引からなる。
- (30) 『朝鮮巫俗の現地研究』は, のちに名著出版より覆刊, 昭和55年(1980)。
- (31) 村山智順『朝鮮の巫覡』朝鮮総督府, 昭和7年(1932)。
- (32) 注7に同じ。シャーマニズム研究に関心を持つに至った動機は京城帝国大学へ赴任の際に船中で読んだ今村納の著作の影響であったとする。
- (33) ここでは研究の要約として辞典類を挙げる。『新社会学辞典』(有斐閣, 平成5年<1993>, 「シャーマニズム」の項, 島蘭進執筆)では召命・世襲・修行型とし, 『文化人類学事典』(弘文堂, 昭和62年<1987>, 「シャーマン・シャーマニズム」の項, 佐々木宏幹執筆)では世襲を外して召命型, 修行型の2つに分類, 『朝鮮を知る事典』(平凡社, 昭和61年<1986>, 「シャーマニズム」の項, 崔吉城・依田千百子執筆)では秋葉同様, 降神巫と世襲巫に分ける。
- (34) 李杜鉉他『韓国民俗学概説』(注9に同じ)。
- (35) 秋葉隆『朝鮮民俗誌』(注27に同じ)の序説の二「朝鮮の社会と民俗」。
- (36) 注6に同じ。
- (37) 『朝鮮巫俗の現地研究』は啓明大学校により, 1987年に崔吉城訳ならびに解説を付して刊行。『朝鮮民俗誌』の韓国版は東文選より1993年に刊行。韓国語訳は沈雨晟。巻末に詳細な「年譜」(韓国語)と「著作論文目録」(100余篇列挙, 日本語)を付載。